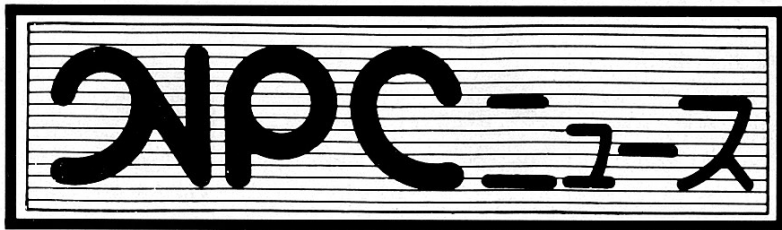


人の日々の生き方は過去を変え
未来をつくる。現在を中心に過去
と未来が戦っている。例え、失敗
多き過去でもそれを礎に深き心
の人へと努めるならば、悪である過
去は善となる。事実は不変だがそ
の意味が変わるのである。



—松浦建設所—

九電・松浦1号機

タービン通気(12/15)

発電機初併列(1/9)行われる

九州電力株式会社松浦発電所では、1号機(出力70万KW)を建設中ですが、昨年の12月15日にタービン通気、次いで本年1月9日に発電機初併列が行われました。

当社は同建設工事においてタービン・発電機据付工事を日立プラント建設株式会社から受注し、昭和60年9月からその先行工事を初

めとして諸工事を鋭意進め、今回の通気、初併列に至りました。

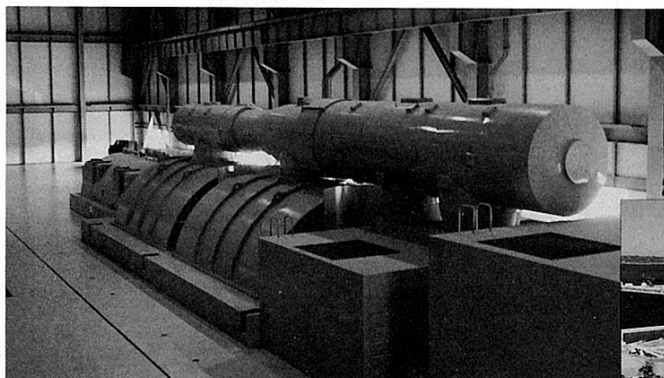
12月15日の通気では、定格回転数の1分間当たり3600回転まで上昇されましたし、本年1月9日の初併列では、17.5万KW(定格出力の25%)まで上昇されました。

今後、徐々に出力が高められながら各機器の性能や保安が確認され定格出力の70万KWに達する予定です。

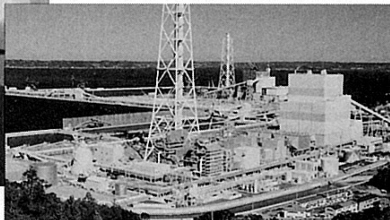
また、同工事において三菱重工プラント建設株式会社から受注し施工している排脱装置据付工事関係は、本年1月19日に通煙を行いました。

なお、2月11日からは約1カ月間機械を停止し、ボイラ、タービン等を点検し、さらに試運転を行い7月には営業運転となります。

(松浦・石黒通信員)



△九州電力株式会社松浦発電所1号機タービン・発電機(上)と発電所全景(右)



原子力P/S体験研修始まる

その必要性、安全性を肌で感じる

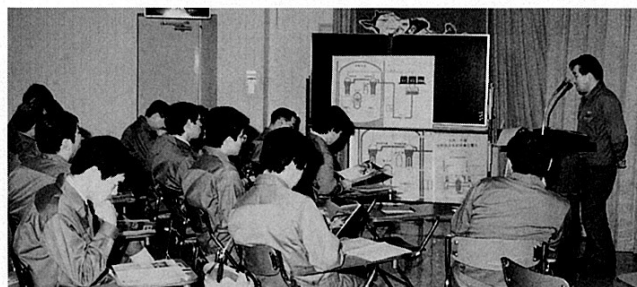
当社は、原子力発電所放射線管理区域内立入未経験者の社員を対象に、原子力P/S体験研修を始めました。

原子力発電は今やわが国の基軸エネルギーとなっていますが、一般の方がたにその必要性や安全性等が充分理解されていません。

そこで、当社社員一人ひとりがその必要性や安全性をより一層理解し一般の方がたの不安や疑問を解く必要があることから、当社社員のうち放射線管理区域内立入未経験者を対象に始めたものです。

第1回目は、1月19日に九州電力株式会社玄海原子力発電所で行われました。参加者は、まず展示館で原子力発電の必要性や安全性等の説明を受け、次に当社事業所研修室で放射線管理区域内立入手順をビデオで学び、実際に放射線管理区域内立入を体験しました。

放射線管理区域内専用の衣服、帽子、靴等を着用し放射線管理員の案内で区域内を見学し、入・退出時には、放射線測定器で管理が充分行われていることを確かめました。



△展示館での説明

「開発工事チーム」を設置

〈一般産業工事を受注から施工まで一元化〉

当社は、2月1日付で一般産業界の工事を受注から施工まで一元的に行う専任のプロジェクトチームとして「開発工事チーム」を設置しました。

当社建設部門の受注は、近い将来の電源開発計画スローダウン等で極めて厳しい状況が予想されますので、経営安定化のため電力関連以外の市場に積極的に挑戦しなければなりません。そこで、一般

産業界での受注・施工法等を調査研究し、実際の受注・施工を通じてそのノウハウを蓄積するため、このチームが設置されたものです。

当チームは、一般産業界の工事を受注・積算から施工まで一貫して行いますが、工事規模に応じ建設部等関連部署と連携し臨機応変に対応します。従って、一般産業に関する営業部・業務部・建設部の職務権限が付与されています。

— 安全表彰 —

○社外からの表彰

表彰日	表彰客先	表彰内容
1.23.	三菱重工環境エンジニアリング株式会社 神戸支社	〈感謝状〉当社が三菱重工環境エンジニアリング株式会社神戸支社から受注し施工した現地工事において、安全の重要性を深く認識し優秀な成果を挙げたとして
1.25.	石川島プラント建設株式会社	〈安全優秀賞〉当社が石川島プラント建設株式会社から受注し施工した工事において、S.63.1.1.~S.63.12.31.の1カ年に258,000時間を超える無災害を達成したとして

○社内の表彰

表彰日	受賞先	表彰内容
12.19.	小倉事業所 川内事業所	無災害記録賞第1種(40万時間)
1.30.	松浦建設所 有限会社 高本工業	無災害記録賞第2種(30万時間)
	小倉事業所 大分共火事業所 北九州LNG事業所 機材センター	年間無災害賞
	大牟田事業所 八丁原事業所 川内事業所 玄海原子力建設所	
	大村事業所 相浦事業所 玄海原子力事業所 大分建設所	
	唐津事業所 豊前事業所 川内原子力事業所 東ソー工事所	
	大分事業所 戸畑事業所 松浦出張所	

随 想

一度しかない人生

1989年も景気は好調を持続しそうである。円高が続き、輸出の増加に伴う対外摩擦の再燃など懸念材料はあるが、景気は内需主導で引き続き拡大する、との御託宣である。ジム、イワト、イサナギに続く今回の好景気で、日本はとうとう世界に冠たる経済大国となった。誠にめでたいかぎりである。巷にモノが溢れ高額な商品が飛ぶように売れている。マンション、オクションが次々に建設され、即日完売は珍しくない。第三次消費革命の到来である。これも内需

拡大という景気のけん引車になるのであれば喜ばしい現象である。

さて、このように恵まれた環境のなかにおりながら、昭和一ケタで年男の私は、「来し方行く末」についてよく考えさせられる今日この頃である。

「来し方」については反省することしきりである。人生というもののが酒をどのくらい飲んで、マージャンをどのくらいやって、どのくらいハンコをおして、どのくらい会議をやって、どのくらい書類を整理して、と量で表現されるも



監査担当部長

黒澤 庄一郎

のであるならば、私の人生はまあまあのものである。しかし、酒の量と会議の回数などをプラスしても人生とはならない。人生とはそうした個々の量によって表現される行為のうしろにある意味であり、生き甲斐の問題ではないだろうか。

このように考えると「私の人生暗かった」である。

したがって、「行く末」については慎重にならざるを得ない。この世の中になった一度しかない人生。誰が真似ようとしても決して真似ることのできない、この世でたった一つの自分の人生。タイムトンネルがあればぐり抜けて取り戻してきたい一度しかない人生。この世でたった一度しかない人生を、誰も自分に代わって生きてはくれない。

では、どのように生きればいいのか。一度しかない人生だから悔いのないものにしたいと考えるのは誰しも当然である。

かの土光敏夫先生(このように呼ぶのが最もふさわしい)は、い

かに生きていくかについて明快な指針を示されている。

中国古典の「大学」の一節、「まことに日に新たに、日々に新たに、また日に新たなり」である。土光先生はこれを「今日という一日は、神が全ての人に平等に与えた大事な一日である。だから今日に全力を傾け、有意義に過ごしたい。昨日も明日もない。新たに今日という清浄無垢の日を迎えるのだ」と解釈し実践された。

私のような凡人には、これを実行することは困難かもしれないが一度しかない人生の残り少ない貴重な時間を、価値あるものにするためには、これしかない。

そうすれば、大手を振って三途の川を渡ることができるであろう。